

1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	0793100074		
法人名	株式会社エコ		
事業所名	グループホーム楓 1階		
所在地	福島県田村郡三春町大字貝山字沼倉177番地		
自己評価作成日	令和5年10月31日	評価結果市町村受理日	令和6年1月31日

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

新型コロナウイルス感染症が、5類感染症に移行されましたに伴い再開された、葛尾村主催の敬老会に、参加するなど、定期的に葛尾村へ赴き、故郷への想いを大事にしています。面会の制限などご家族様にはご不便をお掛けしましたが、感染予防とQOL低下防止の両立を図るため、行事の開催や面会については、感染症の流行程度を考慮して対応してきました。11月上旬には葛尾村で開催される感謝祭に参加を予定しております。今後、このような感染症の流行などあるかと思いますが、故郷への思い、家族様との関係性が薄れないように、取り組んでいければと思います。

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	http://www.kaigokensaku.mhlw.go.jp/07/index.php
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	NPO法人福島県福祉サービス振興会		
所在地	〒960-8253 福島県福島市泉字堀ノ内15番地の3		
訪問調査日	令和5年12月21日		

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

- 葛尾村指定事業所として三春町に開設しているため、二重居住区域の特殊性から葛尾村出身利用者の故郷への思いを大切にして、季節に応じた故郷訪問を行いコロナ禍時は車窓から眺められるよう支援してきた。今般、5類移行に伴い、村主催の各種行事に積極的に参加し、故郷への思いを叶えられるよう取り組んでいる。
- 村の広報誌や村の状況が掲載された新聞記事の提供、電話等での家族との連絡など、馴染みの関係を保ちながら、これまでの普通の日常の生活が営まれるよう支援している。利用者同志の普段の会話が楽しく交わされ、穏やかな生活状況がうかがえる。
- 職員の経験年数やスキルに応じた研修を実施しており、資格取得支援を行いながら職員のスキルアップを図り、サービスの質の向上に努めている。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当する項目に○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらい 3. 利用者の1/3くらい 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者と職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きとした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、活き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々々の状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らしている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー)+(Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
I. 理念に基づく運営					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	年度ごとにホーム独自の理念の見直しについて話し合っているが、現在の理念になってから変更はない。毎朝申し送り時に唱和し、全職員が共有している。特に葛尾村指定事業所であるが、三春町に立地し三春町住民の方も入居されていることから、両自治体の社会資源を活用できるように意識して取り組んでいる。	毎朝、職員申し送り時に理念を唱和しながら共有し、利用者へのサービスにつなげている。また、毎年、理念について全職員で振り返りを行い確認している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	コロナ禍前に地域とのつながりが持てるように、消防団への訓練参加など要請していたが、コロナ禍となつてしまい、関係性が薄れてしまった。三春町にある恵下越団地の集会所に訪問するなど、地域との関係性維持には努めている。	利用者が故郷との関わりを持ちながら生活できるよう、葛尾村での行事等には積極的に参加している。三春町地区自治会へは葛尾村の事業所としての地域認識から加入までは至っていないが、コロナ禍以前は三春町の文化祭等への作品展示や見学を実施している。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	地域の方の見学を受け入れる際には、認知症の症状等の説明を行っている。グループホーム以外の介護サービスについても説明し、より良い支援体制が選択できるように努めている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、事業所の取組内容や具体的な改善課題がある場合にはその課題について話し合い、会議メンバーから率直な意見をもらい、それをサービス向上に活かしている	コロナ禍以降対面での開催は中止している。9月開催予定であったが、新型コロナウイルス事業所内療養もあり、中止した。今後は感染症の流行程度をみながら、対面開催としていきたい。	コロナ禍で書面での開催を余儀なくされている。各委員(村・村社協)には報告資料と共に意見・要望書を送り、意見を頂くよう取り組んでいる。しかし、家族や地域の代表者等の参加が得られず、事業所も課題として捉え検討している。	運営推進会議委員について、利用者または家族・地域代表者が構成員として参加出来る取り組みを期待したい。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者とは日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くように取り組んでいる	葛尾村担当者とは入居者状況、入居者予約等、密に連絡をとり情報の交換をしている。また三春町介護事業所連絡会に加入し、三春町の事業者とのつながりもできてきている。	村の担当者とは、震災避難後も常に連絡を密に取り協力関係を築いている。利用者が暮らし易いよう、村の情報提供やイベント参加の際の弁当手配等、村が積極的に支援を継続している。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	定期的に身体的拘束等適正化検討委員会を開催し、身体拘束についての勉強を行っており、身体拘束は、心身機能の低下を著しく招くことについて理解している。また日常のケアの中でもスタッフ間で話し合える環境となっている。	事業所の「身体拘束等の適正化に関する指針」に則り、身体的拘束適正化検討委員会が定期的に開催されている。職員に対する研修会や身体拘束をしないケアの実践に事業所全体で取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7	福-1	○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待の芽チェックリストの実施、虐待(不適切ケア)について分析し話し合い虐待防止に努めます。また、入居者様の声にも耳を傾け、虐待の危険を早期に見つけ、速やかな対応を心がけています。	事業所の「虐待防止のための指針」により、虐待防止検討委員会は身体的拘束適正化検討委員会と一体的に活動している。委員会や研修会の開催、職員アンケートを実施し、分析結果を話し合いながら、早期発見と虐待防止に努めている。	
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	現在成年後見制度を利用している方はいないが、職員が研修を受け理解を深めている。今後制度を利用する方がいる際は、再度職員間で周知する。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約又は改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約の前より入居等に関する疑問点などを確認している。契約時には再度疑問点などを確認し、十分に説明のうえ納得をいただくようにしている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	日々の会話から入居者様の意見、要望を第一に尊重し、ご家族様には往診結果や現状報告の連絡の際、意見、要望等伺い運営に反映させている。	日常生活の中での会話や言動から、利用者の希望や要望を把握している。また、家族からは面会時や電話連絡の際に意見や要望などを頂いている。頂いた意見や要望は運営に反映するよう努めている。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	感染症対策として以前より少人数での開催となっているが、管理者会議の内容についてスタッフ会議で報告し情報の共有をし、その際、意見、提案を聞いている。また、仕事であっても気軽に意見を出してもらい運営に繋げている。	管理者は、日頃から職員が意見や要望を出しやすい職場づくりを心がけている。各種会議や委員会活動、スタッフ会議等で職員の意見や提案を把握し、運営に反映している。法人管理者会議で意見や要望を吸い上げる仕組みがある。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	年2回、自己評価シートを作成し、面談を行い、職員の現状を把握している。また個々の実績を運営法人に報告し、処遇に反映させている。		
13	福-2	○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	運営法人では資格取得の補助を行っており、当該ホームでも資格取得を推進している。また動画、資料を基に研修を受け、質の向上に努めている。	職員のスキルに応じた研修体系を法人全体で共有している。職員の自己評価シート結果を基に、職員面談を行い、職員の目指している「将来像」や資格取得などをサポートしており、階層別研修の受講推進などスキルアップに取り組んでいる。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	グループホーム協議会に加入し、研修に参加する事で交流を図っている。(オンラインでの参加) また、三春町事業所連絡会に加入したことで、同業者との交流も増えている。		
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	実態調査は和やかに話しを進め、今までの生活歴、不安な事、好きな事等、お話しの中から本人様の気持ちを受け止め、安心した生活ができるよう関係づくりに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	ご家族の意向、要望をしっかりと伺い、ご家族様と本人様との関係、ご家族内(近親者)の関係に耳を傾け、気持ちを受け止め、関係を築いている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	本人や家族が希望することなどは介護保険にとらわれず多岐にわたるサービスが利用できるようにしている。口腔衛生に関しては歯科衛生士の協力も頂いている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	役割として新聞置や洗濯物たたみ、調理過程への参加などを行っている。できることは行って頂く事で、生活リハビリとしている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	現状をお知らせし、不安な事あれば電話し直接話していただき、情報の共有をし、ご家族と本人の関係に配慮している。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	以前のような外出は難しくなっているが、広報誌「かつらお」を見たり、新聞記事を見たりし葛尾村の情報をとりいれ支援している。感染対策に注意しながら家族同行の通院など支援に努めている。	故郷の広報誌や新聞記事で情報を得るなど関係が継続できるよう取り組んでいる。また、村の開催行事に積極的に参加し、避難前の交流継続に取り組んでいる。家族対応の通院や外出支援、友人・知人との交流についても支援している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	入居者様同士の相性を把握し、職員が介入しながら、楽しく生活できるよう支援している。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	サービス利用が終了しても家族様との交流があり、相談や問い合わせがあった時は対応している。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	ご本人との会話の中で、一緒に生活していく上でどのような事を望んでいるかを伺い、困難な場合は今までの生活の中での思い等をくみ取り検討している。	日常生活の中で、利用者の思いや意向の把握に努めている。入浴時間やケア場面等は、本人の思いを汲み取る良い機会として丁寧に聞き取るようにしている。訴えが困難な場合は、日頃の言動や家族等からの情報を基に、本人本位に検討している。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	入居時に、ご家族、ご本人から生活全般について伺い、課題分析(アセスメント)を行い、職員で共有している。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	業務日誌の確認、いつもと違う事の気づきの共有、申し送りの徹底をし、現状の把握に努めている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	本人の今の思いや困っている事などを生活の中で聞き取り、ご家族や関係者と話し合い介護計画を作成している。	新規1ヶ月の介護計画を作成し、3ヶ月毎の見直しを行っている。居室担当者がモニタリングを行い、ケース会議の中で意見を出し合い、本人・家族の意向を反映した介護計画を作成している。状態変化時は状況に応じた見直しを行い、現状に即した介護計画を作成している。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	個別に生活を観察し、記録している。ケアプランに沿って記入している。ADLの変化や気づきにより介護計画の見直しに活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	基本的なサービスはもちろんの事、本人や家族の思いを伺い、ニーズに応えるべくスタッフで検討し対応している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	5類感染症に移行されたことで、以前の状況に戻りつつあるが、葛尾村、社会福祉協議会と今後も連携を図り、情報をいただき、入居者様が楽しむことができる地域資源の活用をしていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	ご家族の協力を得て、かかりつけ医の受診を続けていただいている。その際は健康状態がわかるようにメモを渡している。またご家族の希望に応じ、訪問診療を受けることもできる。	かかりつけ医受診を基本とし、家族協力を得て通院時は家族へ健康状況を記入したメモを託し受診結果は、家族から口頭で得ている。また、希望により在宅クリニックの往診を利用している方もいる。歯科は訪問診療を利用し適切な診療を受けられるよう支援している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週1回の訪問時に入居者様の状態を報告している。便秘の方の相談や、心身状態を報告し、適切なアドバイスを受け、医療につなげている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	入院時サマリーなどの情報を提供している。入居者が入院した際家族や病院関係者との情報交換や相談を行い、安心して治療し退院できるように取り組んでいる。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所でできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	重度化した場合に医療機関とご家族と連絡を取り話し合い、終末期にホームでの看取りを希望する場合にチームで支援できるように取り組んでいる。	入居時に本人・家族へ看取り指針と医療連携体制同意書の説明及び事前確認書で意向を確認している。終末期に再度意向を確認し、主治医・家族・職員が連携し意向に沿った支援をしている。感染対策を取りながら、最後の時を居室で家族と過ごしていただいている。看取り後は、会議で振り返りをし支援に活かしている。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎月救命救急の講習があり、全職員が事故に備えた訓練を行い、身に付けている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に避難訓練を行っており、全職員が有事に対応できるようにしている。備蓄品は本社と連携しながら管理を行っている。地域消防団の参加までには至っていないのが今後の課題。	年1回総合避難訓練に消防署が立ち会い、毎月年間計画に基いて、風水害・搬送・伝達訓練等を実施している。非常時に備え食料品の他、カセットボンベや防寒シート類等を備蓄し本社が管理をしている。事業所は東日本大震災での全村避難地域の利用者に特化しているため、現住地域の協力を得る糸口が見つからない状況である。	事業所近隣の地域の方へ協力を依頼し、協力体制を築くことが望まれる。
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	法人の理念である「人間として尊厳を失わずに暮らしていけるようなケアを提供する」を心掛け、声掛けや対応に気を付けている。	定期的に虐待の芽チェックリストを活用し、業務の中でお互い注意し合いスピーチロックに気を付ける取り組みをし、利用者一人一人の人格を尊重し誇りやプライバシーを損ねない対応に努めている。個人情報研修を実施し、また、鍵のかかるボックスに適正に保存している。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	入居者様とコミュニケーションを取り、その人の希望や願いに気付き、自己決定しやすい環境作りを心がけている。入居者様に声掛けをして、ご本人が選択できるように心がけている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	一人ひとりの生活のペースを大事にし、職員が入居者様に合わせながら、ストレスなく生活できるように支援している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	好みの色の洋服を誕生日プレゼントで贈ったり、着替えの際は一緒に服を選んだり、汚れたらすぐ着替え、身だしなみに気を付けている。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事に関連した作業を利用者とともに職員が行い、一緒に食事を味わいながら利用者にとって食事が楽しいものになるような支援を行っている	食事がチルド化になり、調理の機会を設けることは難しいが、食事準備の過程(盛り付け、下膳など)可能な入居者様にはやりがいをもちながら作業できるように支援している。畑やベランダで収穫した野菜も提供している。	チルド食を利用し、ご飯・みそ汁は事業所で調理しながらベランダ菜園の季節の野菜を提供する等工夫をしている。利用者は、出来る範囲で野菜の下処理や盛り付け、配膳、テーブル拭き、おやつ作りを手伝っている。また、出前を利用し食事に変化を持たせる等、食事を楽しんでいる。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	禁食がある方には、代替品を提供している。1日の水分摂取量が確保できるように摂取量を把握し、好みの物を飲んでいただいている。摂取量が少ない方は、声掛けし、介助をして摂取できるようにしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	毎食後、口腔ケアの声掛けにより口腔ケアをしている。できない部分は介助している。運営法人の歯科衛生士の協力を得て、通院が必要な方は歯科通院をしている。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	夜間はセンサーを使用し、トイレで排泄ができるように、個々の排泄パターンを把握している。ベッドの位置を変える等、トイレまでの動線を短くし転倒のリスクを軽減している。	排泄は、個人の排泄パターンを把握しながら、起床時や食事、おやつ等の行動の区切りに声掛けをし誘導をしている。リハビリパンツから布パンツへ改善した方もおり、排泄の自立支援に向けて取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	排便の有無を確認し、医師の指示の下、下剤の調整をしている。また、牛乳、乳製品の提供をし個々に応じた対応をしている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	定期的に入浴の声掛けを行うが、本人の希望によって入浴せずに翌日に再度声掛けを行ったりと柔軟に対応している。	入浴は週2~3回午前中を基本とし、希望により午後も対応している。湯舟はその都度入れ替えている。日々入浴剤を利用し、菖蒲湯・ゆず湯等も行い季節感を味わっていただいている。入浴を拒む方へは、時間や職員を変える等工夫をし、個々に沿った支援をしている。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	起床、臥床の時間は、ご本人の意思を尊重している。室温、居室の明るさも本人の希望に対応している。夜間起きてきた際は、傾聴を心掛け、安心して入眠ができるように支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	受診後、職員がご家族から話を伺い、受診内容、服薬記録の記入をし、全職員が確認し情報の共有をし服薬支援している。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	出来ることを無理強くないようお願いし、役割のある生活の支援をしている。また晩酌、カラオケ等趣味に合わせた対応をし、楽しく過ごせるように支援している。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍前の状況に徐々に戻りつつある。感染対策を行うことが前提であるが、葛尾村へ外出することや行事で外出する機会が増えてはきている。	利用者は出身地の村行事や敬老会、感謝祭、季節の花見に会社のバスを利用して出かけている。家族や知人との交流、村の昔ながらの食堂の昼食弁当等をとても楽しみにしている。コロナ禍時は、バスの車窓からの村見物であったが、現在は利用者の希望に沿った支援に取り組んでいる。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	ホームの事務所にて金銭をお預かりしているが、少額自己管理されている方もおり、お金を所持することで安心されている方もいる。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	電話の取り次ぎをして会話ができるようにしている。贈り物があった際は、お礼の電話ができるように支援している。また、手紙があった際は、本人に手渡し、必要に応じて代読している。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	花、写真、絵などを飾り、入居者様が居心地よく過ごせる環境づくりに努めている。季節の飾りつけも行うが、動線を考え、妨げにならないように注意している。	リビングの壁に、利用者が作成した折り紙・塗り絵・故郷の山の貼り絵・帰村時の記念写真が掲示してある。また、応接セットで日々利用者が一休みする等している。2階のベランダからも花が眺められ四季が感じられる。温度と湿度は職員が管理し居心地よく過ごせるよう配慮している。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	ソファ、テーブル席があり自由にくつろいでいただいている。広い空間の中で、自分の居場所で好きなように過ごされている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室、或いは泊まりの部屋は、プライバシーを大切にし本人や家族と相談しながら、居心地よく、安心して過ごせる環境整備の配慮がされている(グループホームの場合)利用者一人ひとりの居室について、馴染みの物を活かしてその人らしく暮らせる部屋となるよう配慮されている	慣れ親しんだ物、自宅で使用していたものを揃えていただき、居心地良く生活できるよう配慮している。	居室には洗面台・トイレが付設しており、ベッドとテーブルが備え付けてある。使い慣れた寝具や家具等を持参し、家族写真や作品の塗り絵を飾り位牌・遺影を持参するなど、その方らしく暮らせる部屋となるよう配慮している。また、入居まで使用していた茶碗・カップ・箸等を持参し使用している。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	一人ひとりのADLに合わせ、手すりの設置や、家具の配置をしている。症状に応じた介護用品を使用し、自立した生活が送られるように工夫している。		